

真夜中三重丸

愛結びの儀
~迷い込んだ村で
巫女と行う淫らな儀式~

プロローグ

1章 儀式1日目

2章 儀式2日目

3章 儀式最終日

エピローグ

プロローグ

炎熱の夏日、陽射しは燃え盛り、アスファルトは輝いていた。

大学の夏休みに突入し、朝倉陽太（あさくらようた）は趣味のバイク旅を満喫していた。

風を切り、心地よい振動が手を包み込む。

道路は果てしなく続いているようで、陽太は自由の喜びを感じながら走っている。しかし、細く曲がりくねった山道を進むうちに、バイクのエンジンは不規則に咳き込み始めた。

ガソリンが少なくなっていることに気づき、そろそろ給油しなければならぬ時間が迫っていることを悟る。

しかし、周囲には何も見当たらない。

静かな風景が広がっているばかりだった。

焦りを感じつつも、バイクを走らせること数分。

道路はますます狭くなり、やがて舗装も途切れ、未舗装の小道に変わっていく。

小道を進むうちに、不安を感じつつも、その美しい風景に心を奪われていった。青々と茂る森、さえざる鳥の声、流れる川の音。

どこか神秘的な雰囲気が漂っているようだった。

突然、バイクのエンジンがガクンと止まり、沈黙が訪れる。

焦りながらキックスタートを試みたが、エンジンは再び反応することはない。

がっかりと肩を落とし、手に持っていたスマートフォンで地図を確認しようとしたが、ここでは電波が届かないようだ。

途方に暮れて歩いているうちに、小道の先に小さな村らしき集落が見えてきた。

村はどこか懐かしさを感じさせるような趣きがあり、陽太は少し安心する。

日が傾いてきた頃、村に到着した。

小さな家々が風景に溶け込むように建ち並んでいた。

村は静かで、人々の姿も見当たらない。

少し歩いた先に、小さな神社が佇んでいるのを見つけた。

神社の前には美しい鳥居が立ち、その奥には木々に囲まれた境内が広がっていた。

興味津々で境内に入ってみると、そこに中学生くらいの巫女服を着用した少女が

箒で庭を掃いているのが見えた。

少女の肩ほどに切りそろえられた黒い髪が風になびきながら、一生懸命に掃いている様子は、神秘的な雰囲気醸し出しているようだった。

しかし、その少女の特筆すべき点は、神秘的な雰囲気とは対照的な、劣情を催すような体つきだろう。

大きな胸は巫女服を持ち上げ、今にもはち切れんばかりである。

さらに、くびれた腰つきや、ふっくらとしたお尻など、そのへんのグラビアアイドルよりも魅力的な肢体を惜しげもなくさらしている。

陽太は、思わずごくりと唾を飲み込んでしまう。

彼女は陽太の視線に気づいたのか、手を止めてこちらに顔を向ける。

その顔はあどけなく可愛らしい印象で、大きな瞳と小さな鼻や口など、整った顔立ちをしていることがうかがえた。

「こんなところでどうされましたか。お兄さん？」

人を疑うことを知らないような純真無垢な笑顔で、彼女は問いかけてくる。



いやらしい目で見てしまっていたことに少し罪悪感を感じながらこの場にいることの説明を始めた。

「あ、こんにちは。実はバイクで旅行中で、道に迷ってしまつてガス欠になつてしまつたんです。この村にたどり着いたんですけど、ガソリンを調達する場所があるかなつて……」

巫女の少女は興味津々の表情で陽太の話聞き、少し考えた後に微笑みながら答えてくれる。

「ガソリンのことは心配いりませんよ。村の人にお問い合わせもらえると思います」

陽太は少女の言葉に安堵し、感謝の気持ちで頷いた。

「でも、もう日も暮れてしまつていますし、街までは遠いですよね。明日になつてからガソリンを調達するのはどうでしょうか？」
そう少女に提案される。

「それなら、是非お願いしたいです。ただ、どうしようかな、夜の間……」
陽太は少し困つたように言った。

すると、少女はにっこりと笑つて言った。

「それなら、うちに泊まっていてください。母と一緒に、美味しい夕食を用意しますよ」

いきなりの申し出に、陽太は少し驚きつつも、「そんな、悪いですよ」と遠慮した。

しかし、巫女の少女はとても明るい笑顔で返す。

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ！」

その笑顔につられ、陽太も思わず微笑んでしまった。

陽太は彼女の親切な提案に感謝しながら、「それなら、お願いします」と答えた。少女に案内され、陽太は神社からさらに奥へと歩いていく。

「そういうば名前聞いていないね。僕は朝倉陽太です。君の名前は？」

「私は姫川紫音（ひめかわしおん）です。よろしくお願いします、陽太さん」
そう言って、紫音は頭を下げた。

さらに話を聞くと紫音は15歳の中学生3年生でこの姫川神社の一人娘で巫女をしているらしい。

「もうすぐ家に着きますよ」

紫音の案内で、陽太は村の奥にある彼女の家に到着した。

家は木造で、温かみがありながらも格式のある雰囲気を持っていた。

「ただいま、お母さん」

紫音は玄関の戸を開けながら、中に向かって言った。

「あら、おかえりなさい。紫音」

家の中から優しい女性の声が響き、玄関まで歩いて来た。

女性は綺麗な黒髪で、年齢が20代半ばくらいに見える。

お母さんと呼ばれてやって来た女性は紫音の姉かと勘違いするほど、とても若々しく、美しい顔立ちをしていた。

紫音の母親だと納得のできる、大きな胸とお尻、それでいて腰がキュツと締まった艶めかしい体つきをしている。

着物を着こなすその姿は、まさに大和撫子と言った風情である。

「あら？そちらの方は？」

紫音は陽太を紹介する。

「お母さん、こちらは朝倉陽太さん。バイクで旅行中にガス欠になってしまった村で立ち往生していたんです。明日になってからガソリンを調達するつもりなんですけど、その間泊めてあげたいなって。いいでしょ？」

「あらあら、それは大変ね。こんな田舎の小さな村にようこそ」
彼女は陽太の手を取って挨拶する。

「私の名前は姫川美里（ひめかわみさと）と言います。よろしくお願いしますね、
陽太さん」

「あ、はい。よろしくお願いします」

陽太は緊張して挨拶を返す。

「さあ、遠慮せずに上がってください。夕食の準備もすぐできますから」

紫音の母の美里は微笑みながら陽太を家に招き入れてくれる。

「ありがとうございます。お世話になります」

美里の温かい歓迎に安心感を感じつつ、家の中に入っていった。

部屋は和室で、畳の上には低いテーブルと座布団が並べられていた。

美里は陽太に座るように促し、紫音も隣に座った。

夕食の時間が訪れ、美里が用意した料理が次々とテーブルに並べられた。

美里の手によって運ばれる料理は、新鮮な山の幸と地元産の野菜がたっぷりと使われているものばかりだった。

色とりどりの料理が目には鮮やかに広がり、陽太は感激しながら料理を楽しんでいた。

「美味しいですね、本当に。こんなに美味しい料理を出していただいて、感謝の気持ちでいっぱいです」

陽太が笑顔で言うと、美里も嬉しそうに微笑みながら頷いた。

「いいえ、こちらこそお役に立てて嬉しいですよ。久しぶりに若い男性とお話できるのも楽しいですし」

紫音もうれしそうに笑って、陽太と楽しく会話を交わした。

夕食の時間は和やかで、自然と陽太は彼女たちとの距離を縮めていくことができた。

食事が終わり、テーブルを片付ける手伝いをしようとする陽太に、美里は微笑みながら断る。

「大丈夫ですよ、陽太さん。お客様としてお招きしたのですから、どうかおくつろぎください」

紫音も同じく、陽太を気遣って笑顔で頷く。

食後、美里はお風呂の準備を整えると案内してくれた。

温かいお風呂に入り、疲れた体を癒すことができた陽太は、その後、用意された布団でぐっすりと眠りについた。

翌朝、窓から差し込む光で目を覚ました陽太は、紫音と美里が朝食の準備をしているのを見つけた。

ふたりは笑顔で陽太を迎えてくれる。

「おはようございます、陽太さん。よく眠れましたか？」
紫音が尋ねる。

「はい、とても良く眠れました。ありがとうございます」
朝の明るい雰囲気に含まれながら、陽太は紫音と美里と一緒に朝食を楽しんだ。
新鮮な野菜と手作りの料理が並ぶテーブルを囲んで、和やかな会話が交わされる。
「昨日、お風呂と夕食、本当にありがとうございます。こんなにお世話になっ
てしまって申し訳ないです」

陽太は謙虚に頭を下げると美里は優しい笑顔で応えた。

「いいえ、お役に立てて嬉しいですよ。まさかこんなに素敵な方と出会えるなんて思ってもいませんでしたから」

紫音も微笑んで陽太に向かい、続けた。

「本当に、陽太さんがここにいてくれるのは嬉しいことですよ」
陽太は二人の笑顔に包まれ、ほっとした気持ちで彼女たちとの時間を楽しんでいた。

朝食を済ませると紫音の案内により、村の住人からガソリンを分けてもらい、バイクに給油してもらっていた。

その際、村の住人たちが陽太を見ながら何かを囁いているのに気付いた。

村の外の住人がそんなに珍しいのかなと思いつつもそのことについて何気なく紫音に尋ねてみると、少し戸惑いながら答えてくれる。

「陽太さん、実はこの村には特別な儀式があるんです。100年に一度、若い男性と巫女による愛結びの儀が行われるんですよ」

「愛結びの儀？」

陽太は興味津々で聞き返す。

「愛結びの儀とは、若い男性と巫女が3日間同棲し、お互いに愛を深める儀式なんです。それによって村の繁栄と幸福が訪れると信じられているんですよ。でも、

若い男性が村に居なくて困っていたんです。なので、村の人たちは陽太さんにその儀式に加わってほしいと思っっているようなんです」

陽太は驚きつつも、紫音の説明を聞いていた。愛結びの儀という特別な儀式が、村の繁栄と幸福をもたらすとされていることを知ると、なんとも神秘的で魅力的なものに感じられた。

「陽太さんがこの村に迷い込まれたのも、きっと何かのご縁かもしれないかもしれません。どうか、この村で行われる愛結びの儀に参加していただけませんか？」
紫音からのお願いに考え込むとふと一つの疑問が頭に浮んできたため質問してみる。

「それで……儀式に参加する巫女さんって言うのは紫音ちゃんのお母さんである美里さんなのかな？」

「いえ、参加するのは私です。私が巫女として陽太さんと愛結びの儀を執り行います」

「えっ？紫音ちゃんが！？」

驚いて聞き返してしまう。

こんな可愛い中学生の女の子と、それも陽太の好みにどストライクな体つきをした少女とひとつ屋根の下で3日間を過ごすことができる儀式だと聞いて頭の中でいやらしい妄想が広がってしまふ。

実際はそんなことは起こりえないとわかっているけれども、どうしても期待してしまうのが男の悲しい性だ。

紫音はそんな陽太の卑しい感情に気付くこともなく、ただ純粹な瞳で見つめている。

「私は巫女としてこの村の伝統を守ってきました。そして、今回の愛結びの儀が村の未来にとって重要な意味を持つと感じています。ですから、陽太さんに参加してもらいたいんです。その儀式を通じて、村の繁栄と幸福が訪れることを願っています」

紫音は真剣な眼差しで陽太を見つめて言った。

その熱意と真剣な視線を見ると、この儀式の重要性をひしひしと感じてくる。紫音の願いに対して、陽太は笑顔でこう答えた。

「そういうことなら喜んで協力するよ。この村の繁栄と幸福のためになる儀式に参加できるなんて嬉しいことだからね」

紫音は喜びに満ちた笑顔を見せ、受け入れてくれたことを感謝しているようだった。

そんな紫音の表情を見て、やはり本当に可愛い子だなと思うと同時に、こんな可愛い子と一つ屋根の下で生活することになるのだろうかと考えると期待感でいっぱいになった。

1章 儀式1日目

翌日、村の住人たちの祝福を受けながら、陽太と紫音は愛結びの儀を行うための屋敷に向かった。

屋敷は美しい自然に囲まれ、静寂が漂っている場所だった。

陽太は、屋敷に入ると共に緊張と期待が入り混じった気持ちで心躍らせていた。和室に案内されると部屋の中には、伝統的な調度品が配置され、神秘的な雰囲気漂っていた。

「こちらのお部屋へどうぞ」

紫音に促され、陽太は部屋の中に入る。

部屋の中に入ると、微かに花のような香りが漂っているのを感じた。部屋の隅には香炉が置かれており、そこから煙が出ているようだ。

香炉から放たれた煙が部屋をうっすらと包み込んで見えるように見える。

陽太は少しリラックスした気持ちになりながら、用意してくれていた座布団に座るように指示された。

正座で座ると、紫音も同じように正座し三つ指を立て、深々とお辞儀をして挨拶をする。

「主様、本日より3日間、愛結びの儀を執り行う巫女として誠心誠意ご奉仕させていただきます」

紫音のへりくだる姿勢に申し訳なくなり、陽太は戸惑いながら話す。

「主様なんで……紫音ちゃん、そんなにかしこまらなくていいよ。普通に接してくれていいんだよ」

紫音は微笑みながら首を振り、再び頭を下げながら答える。

「いいえ、愛結びの儀の間、巫女は主様に誠心誠意仕え、愛を結び合わせる事が大切な使命なのです。ですので私のことは紫音とお呼びください」
陽太は戸惑いながらも、彼女の決意を受け取り、答える。

「わ、わかったよ……紫音」

紫音は顔を上げて、嬉しそうに微笑むと再び頭を下げ、話を続ける。

「それでは、主様、まずはお召し物を着替えさせていただきます。部屋着を用意いたしましたので、こちらへどうぞ」

陽太は紫音の案内に従い、隣の部屋に入った。部屋の中には和風の衣装が丁寧に用意されていた。

紫音は一生懸命に陽太に衣装を選びながら、微笑みながら話しかけた。

「主様、どのお召し物がお好みですか？」

陽太は選択肢に戸惑いながらも、控えめな色合いの着物を指差した。

「これでいいかな？」

紫音は微笑みながら頷き、手際よく陽太に着物を着せていった。

陽太は自分が和装に身を包むことになるという珍しい状況に、興奮と緊張が入り混じった気持ちでいっぱいだった。

「主様、お召し物がお似合いですよ。素敵です」

紫音のほめ言葉に、陽太は照れくさい笑顔を浮かべた。

そして、新しい衣装で再び和室に戻り、一緒に座布団に座った。

「では主様、何かして欲しいことはございますか？なんでもおっしゃってください」

紫音が微笑みながら問いかける。陽太は少し考えて、あることをお願いした。

「えっと、それなら……耳掃除をしてほしいな」

紫音は優しく微笑みながら、要望に応えるために耳掃除の道具を用意してくれる。「どうぞ私の太ももの上に頭をお任せください」
そう言って紫音は自分の太腿をぽんぽんと叩く。

陽太はゆっくりと紫音の膝枕に頭を預けるように体勢を落ち着ける。
柔らかく軽い感触が直に頭に伝わる。

陽太は緊張しながら、紫音の膝枕の気持ち良さを感じていた。

「どうぞゆっくりおろぎください」

紫音は優しく声をかけながら、耳かき棒で陽太の耳を掃除し始めた。

カリ……カリ……と痒いところを刺激されるくすぐったさと気持ちよさが同時に訪れる。

陽太は思わずふふつと声を出してしまう。

「どうですか？痛かったりしないですか？」

紫音が尋ねてくる。陽太は幸せな気持ちになりながら答える。

「大丈夫だよ。すごく気持ちいいよ」

紫音は嬉しそうな笑顔を見せながら、陽太の耳掃除を続ける。陽太は体の力が抜け、リラックスした状態で紫音の奉仕を受けた。

しばらくが経った後、紫音が不意に言う。

「お疲れさまです。耳掃除が終わりました。どうでしょうか、すつきりされましたか？」

陽太は名残惜しい気持ちになりながら答える。

「ありがとう、すごく気持ちよかったよ」

紫音は嬉しそうに笑いながら、陽太に告げる。

「そろそろ夕食の準備をしなければいけないので、いったん失礼させていただきます」

紫音は部屋を出て、夕食の準備に向かった。

陽太は彼女の背中を見送りながら、1人で物思いにふけていた。

1時間ほどすると、台所から声がかかる。

「どうやら、夕食の準備ができたようだ。陽太は部屋を出て台所に向かっていく。

食卓の上には豪華な料理が並んでいる。

「どうぞこちらへお座りください」

紫音に促され、陽太は席に着く。紫音も向かいの席に座る。

そして、一緒に食事を取り始めた。

「どうぞ、お召し上がりください」

紫音が笑顔で勧めてくれる。陽太は箸を手に取り、料理を口に運ぶ。

美味しい料理に舌鼓を打った。

「美味しいよ、ありがとう」

陽太が感謝の気持ちを伝えると、紫音は嬉しそうに微笑みながら、自分の食事を始める。

食後、食器を片付けた後、紫音がお風呂の準備ができた旨を伝えてくれる。

陽太は入浴の準備を整えた後に早速風呂場に向かった。

脱衣所にはタオルや石鹸が用意されている。

服を脱いで、風呂場に入った。

湯船に浸かり、今日一日の疲れを癒す。

「ふう……気持ちいいなあ」

思わず声が漏れてしまう。本当に気持ちの良い時間だった。

しばらく浸かっていると脱衣場から物音が聞こえる。

何だろうと思って視線を向けると、風呂場のドアが開き、そこにはバスタオルを一枚巻いただけの紫音がいた。

中学生だとは思えない豊満な谷間と、すらっとした体のラインが露わになり、思わず目が釘付けになってしまおう。

「え！？どうしたの急に！？」

陽太が驚いていると、紫音は恥ずかしそうにしながら答える。

「あ、あの……お背中を流させていただきたくて……」

紫音は頬を染めながら、タオル一枚で恥ずかしそうにもじもじしている。その仕事にドキツとしてしまう。

「えっ、いや、でも……」

陽太は戸惑いながらも断る理由を考えようとする。しかし、そんな考えを打ち砕くように紫音は微笑みながら告げる。

「い、いえ……巫女として主様にご奉仕するのが私の役目ですので。これも愛結びの儀の一環なんです」

そう言われると陽太に断れるはずもなく湯船から上がりバスチェアに座る。

その後ろに紫音が跪いた。

「それでは、失礼します」

紫音は優しく陽太の背中を洗い始めた。彼女の細い手が陽太の背中に触れ、優しく上下するたびに快感を覚える。

陽太は顔が熱くなるのを感じ、思わず目をつむる。

「どうですか？痒いところはありますか？」

「う、うん。大丈夫だよ」

陽太が答えると、紫音はさらに丁寧に優しく背中を洗う。やがて洗い終わるとシャワーで泡を流してくれた。

「それでは、お背中を流し終わりましたのでこれで失礼します。ゆっくりおくつろぎください」

そう言って紫音は風呂場を後にした。

陽太は湯船に浸かり、ボーツと天井を見つめていた。

湯船から上がると、体を拭いて寝巻に着替える。

寝巻は、旅館でよくあるような和風なデザインの浴衣だ。

寝室に入るとすでに布団が用意されていた。

ありがたいと感じながら布団に近づくと、一つの布団であるにも関わらず枕が2つ置かれていることに気付く。

(これは……紫音も一緒の布団ということなのかな?)

陽太は戸惑いながらも、緊張しながら布団に潜り込む。

先ほど風呂場で背中を流してもらったときの柔らかい手の感触や、バスタオル一枚で目の前に現れた紫音の裸身を思い出しながら悶々としてみると、部屋がノックされる。

「失礼します」と声をかけながら、陽太の予想どおりに紫音が部屋に入ってきた。そこには、白い寝間着姿に身を包んだ紫音の姿があった。

中学生とは思えない色っぽさと、大人びた雰囲気を感じさせる姿にドキツとする。陽太は慌てて布団から起き上がり、正座する。

そんな陽太の様子を見て、紫音も同じく布団の上に座り、三つ指をついて頭を下げながら丁寧な挨拶をする。



「主様、実は愛結びの儀について一つお伝えしていません」「え？何かな？」

陽太は戸惑いながら問いかける。

紫音は顔を上げると、少し恥ずかしそうにしながらも続きを話した。

「愛結びの儀で一番重要な行為、それは……男女の交わりなのです」
陽太は驚いて思わず声を上げる。

「ええ！？それってつまり……」

紫音は恥ずかしそうな表情で頷きながら答える。

「はい。男女の交わりとは……性行為のことです」

紫音の言葉を聞いて、戸惑いつつも陽太は平静を装って答える。

「そ、そうなんだ……」

紫音は真剣な眼差しで陽太を見つめ、話を続ける。

「3日かけて徐々に愛を育んでいき、最後の夜に男女の交わりをもって、本当の意味で結ばれるのです」

紫音の言葉に、陽太は思わず唾を飲む。

つい紫音の艶めかしい肉体に視線が向いてしまう。

「黙っていて申し訳ありませんでした。母のような美しく魅力のある女性が相手ならば主様も喜んで儀式に臨んで頂けるのでしようが、私のようなまだ女性的な魅力に乏しい未成年の中学生と男女の交わりを行うのは嫌がられるかと不安で、お伝えする勇気が出ませんでした。どうかお許しください」
そう言って頭を深々と下げる紫音。

紫音を見れば世の男性のほとんどは飛び上がって喜ぶであろう魅力的な肉体をしている。

それなのに自分を女性的な魅力に乏しいと卑下していることに陽太は驚く。

「いや、そんなことないよ！紫音は十分魅力的だよ！」
思わず声を荒げてしまう。

「本当ですか……？では、私と男女の交わりをして頂けますか？」

紫音が上目遣いで聞いてくる。その仕草にドキツとしてしまう。

「う、うん。こちらこそ、よろしくお願いします」

陽太は緊張しながら答えた。すると、紫音が頬を赤く染めて恥ずかしそうに微笑む。

「それでは、愛結びの儀で行う男女の交わりについて詳しくご説明させて頂きますね」

「わかった。よろしく頼むよ」

陽太は背筋を伸ばし、真面目に聞こうとする姿勢を見せた。

「男女の交わりは3日かけて行われます。初日は巫女から主様に愛を捧げる奉仕を行います。主様は、巫女が与える快樂に身をゆだねてください」

「え、ええ？」

陽太は戸惑いの声を上げる。紫音はそんな陽太を無視して説明を続ける。

「2日目は主様から巫女に愛をお与えいただきませす。巫女の体を隅々まで責め、快樂を与えます。巫女の体に愛を刻み込むような気持ちで行ってください。主様が我慢できなくなった際は巫女に奉仕するようにお申しつけ頂ければ、いつでもお応えいたします。ただし、挿入はまだ行ってはいけません」

「そ、そうなんだ」

陽太は戸惑い一つも納得する。

「そして、最終日。3日目は主様と巫女が肉体的に繋がり、心も結ばれる日です。主様は巫女の体の奥深くに自らの愛を刻み込むことで、巫女と真の愛を結ぶことになります」

陽太はゴクリと唾を飲み込む。

「巫女の体の奥深くに愛を刻み込むって……そういうことだよね？」
そう聞くと少し恥ずかしそうにしながら、紫音は答える。

「はい……男性器を巫女の膣内に挿入し、子宮まで届かせるように深く突き刺します。そして、子種を巫女の子宮に注ぎ込むのです。主様の愛が巫女の子宮を満たすことによって愛結びの儀が完了します」

あまりにも生々しく淫猥な説明を聞いて今まで我慢していた性欲が一気に湧き上がってくるような感覚を覚える。

そんな陽太の様子を察してか、紫音は優しい微笑みを浮かべながら陽太に問いかける。

「説明は以上になりますが、ご質問はありませんか？」

「う、うん。大丈夫……ありがとう」

陽太は興奮を抑えきれず紫音の体をまじまじと見つめてしまう。

この体を好きにできるのかと思うと、気が狂いそうになるほどの興奮に襲われる。紫音も陽太の興奮を感じ取ったようで、頬を染めながらも覚悟を決めたような表情をする。

「今宵は巫女の紫音より、主様に精一杯の奉仕をさせていただきます。どうぞ、お楽しみください」

そう言って紫音は、三つ指をついて深々と頭を下げる。

「は、はい。お願いします」

緊張しながら答えると、紫音は顔を上げて微笑む。

そして陽太の顔に自らの顔を近づけ、額を合わせる。

二人の視線が至近距離で交わる。紫音はそのまま陽太を見つめ続ける。

紫音の瞳が潤んでいるように見える。そして、その口から熱い吐息が漏れる。

「口付けを捧げさせていただきます。主様に捧げられる日が来るなんて、本当に嬉しく思います。どうか私の初めてを……お受け取りください」

紫音は緊張しているのか、少し震えた声で告げる。

陽太は頷き、覚悟を決めて目をつむる。紫音もゆっくりと目を瞑り、唇を重ねた。柔らかい感触が伝わって来るとともに心臓の鼓動が激しくなる。

しばらく唇が触れ合っていたが、やがてお互いゆっくりと離れる。お互いの顔には朱色が混じっている。

静寂の中、二人は見つめ合った。

「し、紫音。すごく、その……良かったよ」

陽太は照れながら感想を述べると、紫音は嬉しそうな表情を浮かべながら答える。

「私ものです。口づけがこんなにも素晴らしいものだとは思いませんでした」
二人とも恥ずかしそうに微笑み合っていると、ふとした拍子に再び視線が合う。

「もう一回……したいな」

「はい……主様がしたいとおっしゃられるなら、何度でもさせていただきます」

紫音は陽太に顔を近づけてくる。そして、もう一度口づけを交わす。

今度もお互いの唇の感触を確かめ合うように、優しく触れ合った。

しかし、それだけでは物足りなくなってきた陽太は舌を出して紫音の唇を舐める。

紫音はビクツと体を震わせるが、抵抗することなく受け入れた。

陽太はそのまま舌を紫音の口内に侵入させ、彼女の舌と絡み合わせる。

「んっ……ちゅっ……」

お互いの唾液を交換しあい、口内を舐めまわす。

時折漏れる吐息や水音が、興奮を高めるBGMとなる。

しばらくの間、お互いの愛を確かめ合うように夢中でキスを続ける。

やがてどちらからともなく唇を離すと二人の口から銀色の橋が架かり、切れる。

「はあ……はあ……」

紫音は肩で息をしながら、陽太を見つめる。その瞳は潤んでいるように見える。

陽太も呼吸を整えつつ、興奮冷めやらぬ様子で話す。

「ごめんね、つい夢中になっちゃって……」

紫音は息を整えながら答える。

「いえ、私も途中から夢中で舌を絡めてしまいましたので……」

改めてお互いの顔をはっきりと認識すると途端に羞恥心に襲われる。

沈黙が流れるが、そこに確かな愛情があることを感じられた。

「主様、横になってください。全身に愛を刻み込みます」

「う、うん。わかった」

陽太は言われるがまま布団に仰向けになる。

紫音は覆い被さるように四つん這いになると陽太の浴衣の帯をほどく。

そして、浴衣をはだけさせた。